

---

# 旋律の呪詛

横山日和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

旋律の呪詛

### 【Nコード】

N5604X

### 【作者名】

横山日和

### 【あらすじ】

あの日の放課後、僕は曲を聴いた。『運命』。かの有名な作曲家が手掛けたと言われるあの名曲だ。しかしその曲調はどこか淋しげで切なくて……。それが呪いだとは知らされた時、僕は呪われた後だった。

呪い解きバトルが今始まる。

## プロローグ

我が校のお堅い校則によると、生徒一人につき最低一つは部活に入れ、とある。

部活と言っても、帰宅部は部活と認めておらず、運動部はもちろん、美術部などの屋内でする部活は認められているのだ。

入学式の時の校長の言葉をそのまま引用すると「我が校では全員が部活をし、何か自分の趣味を見つけ、学校には部活で遣う金を支払ってもらいたいものです」らしい。

建前とどす黒い願望をさらりと交えた校長の演説は、僕の頭の中で無駄に長たらしかったと書き換えられたことはさておき、僕は自分がどの部活に入ればベストかを理由もそえて紙に書きながら考えていた。

- ・ 文芸部（読書ができたり執筆できたりして楽しそう）
- ・ 魔法学部（魔法がこの世界に存在するならを深入りして考えられて面白そう）

- ・ 真剣部（何にでも真剣になれるのは素晴らしい）
- ・ 傍ら部（学校では禁止されつつある部活だが、バイトができお金稼ぐことができる）

- ・ まったり部（マッタリのほほん）

上記の5つのどれかに入部したいと思っていた。逆に言うと、どれも入りたいと思っていた。誰かに一押しされるとそっちに傾く不安定な棒化している僕の心は、どうやら今はまだ動く余地も見せないようだ。

部活を決めるのは今週末までなので、月曜日である今日からはまだ時間がある。今は放課後のチャイムが鳴ってから2時間経とうとしていて、教室から見る景色はすっかり真っ暗だ。遅くまで部活をしている陸上部や野球部の生徒もまったく見えない。

「帰ろう……」

あまりにも遅いと対応が面倒な学校の先生達がさらに面倒になるだろう。僕は机の横にかけている鞆を手に取り教室から出ていく。教室を出るとまず視界に入るのは廊下。教室から階段までの距離はそう遠くはなく、一つ隣の教室を通りすぎると階段となっている。日が暮れてから学校の階段を下りていくのは何と無くだけど、勇気がいるような気がする。別に階段には電灯がついているため、普段と変わらないのに何だか不気味。幽霊とかはいないと思っていてもやはり怖い。突然音楽室からピアノの鍵盤を叩く音が聞こえてきた。止めてほしい。真っ暗の中でピアノの鍵盤を叩く音が聞こえてくると変に冷や汗をかいてしまうじゃないか。

誰もが知っている、僕も聞いたことがある曲だ。たしか曲名は『運命』……と言いたいけど、それは通称であり本名ではない。『交響曲第5番八短調』だ。

ただし現在僕が耳にしている曲は、どこか切ないアレンジした曲である。つらい人生をピアノが疑っている感じ。

僕はふと過去に起きた嫌な思い出を思い出した。大切な親友と本格的に喧嘩をした時のこと。あの時は一週間くらいまったく話さず、当然のようにしていた登下校を忘れたかのように共に行動しなかった。

次に思い出したのは、僕を大切にしてくれたお祖父ちゃんが、お祖母ちゃんが、殺人事件に巻き込まれて他界してしまったこと。あの時は実家帰りをしていたのだが、お父さんやお母さん、妹は買い物に行っていた。一方、僕はお祖父ちゃんとお祖母ちゃんとTVを見ていた。そして覆面の男が裏口から家へ上がってきた。僕は奇跡的に一命を取り留めたが、お祖父ちゃんやお祖母ちゃんは……。

次に思い出したのは、クラスからのいじめ。僕は男子なのに可愛いと思われ、女子女子と言われたり、キモいと言われたり、死ねと言

われたりした。

その3つの記憶は全て僕が悪い。僕なんて存在があつたから悪いのだ。もし僕がいなかったからこの世界はもっと素晴らしい物になっていたのだろう。無くなれば良いんだ、僕なんて。

「幻破！」

誰かの声が聞こえた、そんな気がした。

それでも僕は、どうして自分なんかが生きているのか、生きていて意味なんてあるのかを考え続ける。死ぬのは怖いこと、そんなことを人間なら誰もが思う。僕だって本当は怖がっているのかもしれない。いつそ天使が運んでくれたら良いのに。もう眠たいよ。眠りたい。寝させてよ。

「悪破っ！」

僕はその声で目覚めた。

学校から離れた場所にある高層ビルの屋上の隅。僕はあと数センチの所で天国へと行っていたところだった。

僕はどうして僕が飛び降りなんてしようとしていたのだろう。まったく思い出すことができないのに、ただただ悲しかった。

僕は初めて号泣してしまう。

「大丈夫、もう大丈夫よ」

泣きじゃくった顔を堂々公表し、僕は声がした方を見る。さっきのアラームボイスと同じ声だ。

そこには僕も知っている、学校でずば抜けた美しさを持つ女子生徒会長、野津白百合のつしろがいた。

彼女の名前にもある白百合のような白い肌、白い髪はショートカットにされていて、唇は誰もを誘惑するかのよう潤っている。目は透き通ったブルー。

可愛いと言うより美しい彼女は無口で、誰かと話している場面を見たことがない。ただ現在はそんな印象がまったくくない。

言い方が幼稚かもしれないが、変身した、としか思えなかった。

「もう大丈夫だから、君みたいな男の子が泣いてたら駄目だよ」  
格好良い。

高層ビルの近くにある月が野津生徒会長のためにできたみたいに野津生徒会長と月の相性は抜群だった。

「えっと、僕はどうなつたのですか？」

一番気になつたことを単刀直入に会長に聞く。僕を迷いの森から救出してくれた人だ。きっと何でも知っているはず。

会長は丁寧に答えてくれて、僕はそれを一言一句聞き逃すことなく真剣に聞いていた。

僕は、迷いの狭間から入り込んだある呪いによつて操られていた。その呪いは時間が経つたびにどんどん僕を危険な状態へ追い込み、高層ビルの隅にいた僕はかなり危険な状態だった。その呪いを会長が能力を使つて、払い落としてくれた。

そのことを聞き終えた僕には驚愕よりも先に脱力感が襲ってきた。しばらくは立てそうにない。

会長はさらに付け加えた。

「この世には古くから迷い、苦しみ、病気などで人間が弱っている時に、呪いがその人間に入っていく。つまり呪いとは人間の弱みを突く最悪な物なの。呪いは発生方法はそれぞれ違うけど、圧倒的に多いのは魔手と言われる獣から生まれる。さっき学校で貴方が聞いたベートーヴェンの曲は獣の声つてわけ」

会長はどうしてそんなに細かくまで言うのだろうか、僕はそう思いつながらもすっかりと聞いた。

呪いなんてまったく信じていなかった僕は、会長の現実的な呪いの話しと僕の実体験で、呪いを信じるようになった。この世界には人を操り人を殺していく呪いがある。その人を救い出し世界から死者を減らすのが会長の勤めなのだ。

僕には真似ることさえできない。能力なんて持ち合わせていないし、

勇気もないから。

「凄いですね、会長は」

それしか言えない。他人を助けるために自分の命を捨てることは凄  
い。

それでも会長はたいしたことないという顔をして僕を見た。

「君も真剣になれば能力はつく。私も最初はそうだったわ。泣いた  
日だって数え切れないもの。自分にしかできないことを見つけたけ  
れば真剣部に入って」

それを伝えるとすぐに会長は高層ビルから飛び降りた。……ふえ？  
飛び降りた？このビルから？

下を覗いてみる。そこにはビルの壁をまるで廊下か道路のように颯  
爽と走る会長がいた。手には僕の呪いを追い払った日本刀らしき物  
が握られている。

これが現実なわけがない、僕は夢を見ているだけだ。そう思いた  
いでも、真剣部に入部するべきなのだろう。会長に勧誘されて断るの  
は無理に近い。

僕はそう決心した目で、夜空にちりばめられている星を眺めた。

その後家に帰り、部活届に『真剣部』と書いたことは言つまでもな  
いだろう。

僕は人間を世界を呪詛から救うのだ。

## EP:1 真剣部っ！

すべての物事に本気になる真剣部に入部して部員になること。それがあの呪い事件から僕を助けてくれた野津会長と助けられた僕こと宇賀<sup>うが</sup>春香<sup>はるか</sup>との約束だ。

待ちに待った放課後がやってきた。学生なら開放感に浸るであろう至福の時だが、僕にとっては、これからの高校生活がほぼ決まる放課後である。

古風なドアの前で立ち止まる僕。このドアの向こうに野津会長がいるのだ。少し緊張感を覚えつつ、ドアノブに手をかける。なんだかぼろりと取れてしまいそうなおんぼろなドアノブだ。そのドアの前、僕の後ろには、なぜかずたずたになった防弾マットが山になっている。

実はこの旧校舎は新校舎より古いのに広い造りになっているため、剣道部や柔道部といった広い範囲を要する部活の部員ほとんどが使用しているのだ。放課後にはよく「めんっ！」という声が聞こえてくる。

「伏せてっ!!」

突然聞いたことがあるようないなような、やっぱりあるような、可愛いと言うより冷静なる声が僕の耳元でした。

「えっ?、えっ?」

そんな声を出している僕であったが戸惑っている時間はなかった。耳元の声の主が泥棒を逮捕するようにして乗り掛かったからだ。重たくはない。まるで空気がのしかかったみたいに軽い体が僕を押し倒していた。

「大丈夫?」

大丈夫か大丈夫じゃないかで言うとこの状況が大丈夫じゃないです、

はい。もしここを誰かに見られてもしたら……。

「って野津会長！どうしてこんなことを」

目の前の出来事を疑うことしかできない顔をしているであろう僕は野津会長を見ていた。野津会長は「どういうこと？」とでも言いたそうな疑問の顔をしながら僕を見てくる。

恋愛シミュレーションゲームなら美味しい状況を何とか脱出するべく、僕は「ええっと……」と言い出す。

「野津会長……、どうしたのですか？」

首筋に冷や汗がたらりと流れるのを感じる。ドキドキ、ドキドキ。心臓の動きが早くなってきた。

「ん？」

「いや、だからその。僕を押し倒しているの……」

僕がそう言っていると、野津会長は自分がしている破廉恥なことを分かり、すぐに離れてくれた。

一瞬だけでも絶叫ジェットコースターに乗った気分になったのは僕だけだ。

「これ」

野津会長はしっかりと握りしめた右手を僕に差し出してきた。意外と会長の手、小さくて可愛い。そして何をギュツと握りしめているか見てみると、その中には

「銃弾……」

そう、小さい手にはしっかりと銃弾が握られていた。って落ちて着いてられないっしょ！

野津会長の手にはドアの向こうから放たれた銃弾が一弾あるのだ。昨夜みたいに変身をしていればそんなこともできるかもしれないが、それは人間とは掛け離れた異種の生物、例えると宇宙人、にしかなせない業である。

「何と無く空气中で飛んでいた蚊をぴしってやってみた」

ぴしっというタイミングで手を、ぴしっというグーにする野津会長。可愛い、可愛いすぎる。けど、それ蚊じゃなくて銃弾だからね。でも

たしかに素手で取るなんてできないよ。

ドアが開き、中から女子高生にしては長身な女性が出てきた。手には銃弾を放ったと思われる銃がある。

「けっ。もう少しで貴様の壊死した眼球を貫くことができたっつのに」

銃をくるくると回し、回した後に女性は「くくく」と不気味な笑い声を出しながら、自分のスカートのポケットに銃を戻した。何から何まで不気味な人だ。近くにいたりつか撃ち殺されないか心配で身構えてしまう。

それでも野津会長はまったく顔色を変えずに銃器女に近づく。会長は絶対に撃たれないだろうし、撃たれても銃弾を素手で取ることができる。僕が見ていてもまったくハラハラしなかった。

「部長。こちらが宇賀春香さん、新人だからあまり危険なことはさせないでください」

どうやら野津会長は学校生活では無口という噂が流れているが、部活では積極的に声を出しているらしい。そんなことを部長と言われた銃器女……って、部長だったんだ。その部長に頭を下げている野津会長を見ながら僕はそんなことを思った。そもそも噂はただの噂にすぎない。だから野津会長が無口であることは嘘なのかもしれない。ますます正体が分からない女子高生。でも優しい人にはちがいない。

「ああ。なんかそんなこと言ってたな。可愛い後輩を連れてくる、とか昨夜のメールで」

野津会長はこくりと頷き、僕の近くに寄ってくる部長を見ていた。僕は近付いてくる部長を見た。

「ふむふむ。たしかに可愛い子だ。髪が長く、目がぱっちり、匂いは……くんくん……おお、女の子の子した甘い匂いか。癒やしてくれそうなマスコットキャラが部活に入部してくれたか。部長は嬉しいぞっ！」

僕は悲しいぞっ！

昔からずっと部長が言ったように女の子の子供の体型をしていたため、女の子にしか見られなかった。身体検査だつて男子全員が恥ずかしがって逃げるし、体力測定では女の子と変わらないと言われたし。それで……それで……。妹には「お姉ちゃんだあゝい好き」とか言われて抱き着かれるし。妹よ、僕はお兄ちゃんだぞ。

部長は僕が凹む姿を写真に撮った後、「送信！」と言い誰かにメールを送った。さらに凹む僕を無視して。

「立て、小娘。部室の中に入れ」

小娘ではないが部室に入らなければ部活動にならないので、部長に招かれ部室に入る。

部室といつても、あまり広くはなくこじんまりとしている部屋だ。ただ普通の部屋とは違うのは、怪しげな金庫が部室の端にあることと、これまた怪しげな衣装が全開になっているクローゼットに所狭しに入っていることである。メイド服、婦警服、ナース服、何かのアニメの服が溢れんばかりにあつて凄い。うん、凄い不安！無理矢理着させられたりはしないだろうか……。

「ん？ああ、そのコスプレか。凄いだろ。すべてあのバカコスプレイヤーの物だ。勝手に触るのをあいつは嫌うからな。命が欲しけりや触らないことを勧めるぞ」

いやあ、まさかだよ。何がまさかつて、僕の命を狙つた奴からそんな心配をされるなんてな。それに勝手に触らなくとも部長様に撃ち殺されかけたのですが。もし僕が心臓の悪い人なら即死だ、多分。心配をしてくれたらしい部長はクローゼットをガラガラと閉め、ポツトがある所に行く。

「お茶と珈琲、どっちにするんだ？」

僕が思っていた以上に部長は部員思いの部長だったのかもしれない。疑っていた僕がバカみたいだ。

「じゃあお茶をお願いします」

実は苦い物が僕は苦手である。苦手になつた原因は僕がまだ漢字も

はつきりと読むことができなかつた時、その時は当然英語なんて読めるはずがなかった。夏真っ盛りで喉が渴き、冷蔵庫にあるアルミ缶のドリンクを適当に取り出して飲んだのが、当りか外れか珈琲だったのだ。あれ以来トラウマとなって珈琲やその他の苦い物が大嫌いになって現在の僕がいる。

だから僕は部長にお茶をお願いした。

「ほらよ、お茶だ」

そう言う部長の手にはコップが3つあった。右手だけでコップを3つも持てるなんて器用な人だな、と書いて、3つのコップの中から1つだけ受け取る。

と同時に紅茶の代表とも言えるダージリンの良い匂いが僕の鼻を通じて、癒やしを与えてくれた。

部長は紅茶を啜って、僕に言い出す。

「こう見えてもお茶にはこだわりを持つ真剣部の長だ」

照れたのか顔を下げ部長。意外だ。銃器女も照れることがあるんだね。別にお茶が好きだからってどうこう言わないけど、あの銃を手にかけている部長が照れるなんてありえないっしょ。っていう偏見を持ちつつ、野津会長を見る僕。

野津会長は部長に手渡されたお茶の匂いをにおぎ、満足そうな顔をして部室内にキョロキョロと目を泳がす。この泳ぎはクロールかバタフライである。

「そういえば、玲花君はどこにいますか、部長？」

玲花とはこの部活に所属している部員のようだ。ちなみに現在はこの部屋には僕、野津会長、部長の3人しかいない。もしかしてさっきの物凄い数のコスプレの持ち主だろうか。

我が校の校則で『部活動は最低限5人以上を条件とし、もし達さなければ該当する部活動は直ちに部活動停止すること』となつている。現在の部室には3人しかおらず、コスプレ好きの人が増えたとしても4人と必要最低限人数にたどり着いていないのだ。

部長は3rdである玲花というコスプレイヤーの居場所を答える。

そもそも僕自身は4thなのか、そして玲花は3rdなのかを知らないのだが、適当に3rdと格好良く言ってみた！

「ああ、玲花か。あいつは今頃、天国でゆっくり寝ているころだろうよ。」

部長はそう言いながら自分のスカートに入れていた銃を取り出し、人型になっている木製の掛け紙を目掛けて、BURRN！BURRN！BURRN！BURRN！と連射する。西洋の時代劇でも見たことがあるだろうが、たった今銃弾を放った銃器の銃口からは煙が出る。もちろん部長が手にしている銃は偽物ではないので、本当に銃口から煙が出ていた。煙たい。

天国で寝ているって縁起でもないことを言うな、と言いたくなるが、部長のことだ、もし僕がそんなことを口にでもしたら今度は撃ち殺されてしまいかもしれなかったので、黙り込むことにした。それに

「まあ冗談だ。あいつはクラスの日直とかで今日は来れないらしい」  
こういうことだろうと予め予想していたのだ。予想でもしないとこの部活ではやっていけない。死にたくなければ予想せよ、とでも言うべきか。

この学校でいう『日直』とは何なのか。これは今後の学校生活のためにも知っておかなければならない。

普通『日直』というと、その日の当番として、クラスの雑務をすることを指す。だが、この学校は麻薬が何かで頭がいかれたようなハゲた校長が動かしており、またその校長が最近になって作ったと思われるわけがわからない校則まである。日直という雑務をすることだって、あの校長にかかれれば、クラスどころではなく学校に貢献するため、学校全体の掃除をやらされるのだ。ともかくにも我が校の校長は学校を育てようとすすぎて、生徒から嫌われの対象になってしまう。生徒の敵であり学校の味方、そんなハ……ごぼっごぼっ、そんな校長でありますよ。

日直と聞いて嫌な顔をしないのは余程の掃除好きか、学校ではあまり感情を出さない野津会長くらいしかいない。部長なんて見るからに「めんどい」って顔をしている。

僕は宇賀という苗字のため、偶然にも明日、日直をすることになっている。うわー面倒だなあ。

「部長。あの、僕は明日日直があるので部室に来れないです。はい、すみません……」

僕は深々と、明日部室に来れないことの謝罪の意を込めて、部長に頭を下げる。新入部生である身が、部活をやむを得ず休まなければならぬのは意外と厳しい。そう思いながら、頭を下にした。

「まあこの学校は校則が狂っているからな。明日は休んで良い。そのかわり明後日の部活では真剣になってもらうぞ」

悪戯っ子のような笑顔で部長はそう言った。このときばかりは部長に見えた。まあ本当に部長だけど……。

すっかり話し込みすぎてしまい、その間放置していたお茶が生ぬるくなっていた。それでも部長が注いでくれたため僕はごくくと飲む。「どうだ？皆と話しながら飲むお茶は」

「何と言うか、お茶は皆と飲むことでさらなる幸せをくれるって感じます！」

これは正直な感想だった。もし僕が家かどこかで一人でお茶を飲んでいたらとしても、ここまで美味しくは感じなかっただろう。皆がいるから幸せになれるんだ、と昔に読んだ本に書いてあったことを思い出す。それは今の僕みたいなことを表すのだ。

部長はいつしか悪戯っ子の笑みを止めて、大人の女性という美しい顔で作り出した笑みを僕に見せるようになっていた。

「そう。皆と少しでも良いからいたい、そんなことを私自身では表現できないから、このお茶に任せている。と言っても、私や野津などはまだ2年だから、この部室にあと1年と3ヶ月ほどいられるんだがな。それでも、いつかは離れ離れになる時が来る。その時まで仲良くしたいぞ……」

その部長の目は銃を持つような恐ろしい目なんかではなく、部長として部員のことを思う優しい目だった。

それを見た僕は、ああ部長はいつでも真剣なんだなあ、って思った。

1年後、僕は2年になり、先輩達は3年になる。受験生が7月以降部活に来ることは禁止されているので、その時になると僕は一人の生活に戻ってしまう。だから、だからこそ。僕も部長みたいに真剣になって、思い出を頭のアルバムに残していきたくなったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5604x/>

---

旋律の呪詛

2011年10月19日02時05分発行